

平成 29 年度スーパー・プロフェッショナル・ハイスクール研究実施報告（第 3 年次）（概要）

1	研究開発課題名	超高齢社会を迎えて新たな価値を創造できるバリュークリエイターの育成 ～2025 年を支える地域福祉におけるリーダー的存在へ～										
2	研究の概要	<p>本研究では、我が国における超高齢社会に対応するために、多様で質の高い介護福祉サービスを提供できる専門職の育成及び福祉課題に取り組むことで、地域コミュニティの構築に向けた新たな価値を創造できる人材の育成を目標とし、次の 2 つの視点から研究活動を行う。</p> <p>I 2025 年の日本社会を支える介護福祉士としての専門性の強化</p> <p>介護を必要とする様々な利用者に対し、基本的かつより専門性の高い介護を提供できる能力を育成するための教育内容・指導方法の開発を研究の重点項目とする。</p> <p>II 地域社会と繋がりをもつ福祉実践教育～地域福祉の課題に向けた専門分野との共創～</p> <p>介護福祉士に関する知識・技術を活かした課題対応能力をはじめ、他の専門分野と協働するための教育内容や指導方法の開発を行う。さらに介護福祉士の専門的な立場から地域の福祉課題に主体的に取り組む、新たな価値を創造するための教育内容や指導方法の開発を研究の重点項目とする。</p>										
3	平成 29 年度実施規模	福祉ボランティア科を対象として実施した。										
4	研究内容	<p>○研究計画（指定期間満了まで。5 年指定校は 5 年次まで記載。）</p> <table border="1"> <tr> <td>第 1 年次</td> <td>介護を必要とする様々な利用者に対し、基本的かつより専門性の高い介護を提供できる能力を育成するための教育内容や指導方法の開発</td> <td>大学・企業等の専門分野との連携</td> </tr> <tr> <td>第 2 年次</td> <td>介護福祉士に関する知識や技術を活かした課題解決能力を育むアクティブ・ラーニングの視点による授業改善の研究 大学・企業の専門分野と協働するための教育内容や指導方法の開発</td> <td>大学・企業等の専門分野との協働</td> </tr> <tr> <td>第 3 年次</td> <td>介護福祉士の専門的な立場から地域の福祉課題に主体的に取り組む、新たな価値を創造・発信できる人材育成に向けた教育内容や指導方法の開発</td> <td>地域社会へ発信</td> </tr> </table> <p>○教育課程上の特例（該当ある場合のみ） 特例による教育課程の変更は行っていない。</p> <p>○平成 29 年度の教育課程の内容（平成 29 年度教育課程表を含めること） 別添資料 1 平成 29 年度教育課程実施計画表 参照</p> <p>○具体的な研究事項・活動内容</p> <p>I 2025 年の日本社会を支える介護福祉士としての専門性の強化</p> <p>介護・福祉ニーズの多様化・高度化に伴って求められている「介護を必要とする幅広い利用者に対する基本的な介護を提供できる能力」を身につけ、さらに最先端の介護知識や技術を兼ね備えた専門性の高い人材を育成するための教育内容や指導方法について次の 6 分野から研究を行った。</p>		第 1 年次	介護を必要とする様々な利用者に対し、基本的かつより専門性の高い介護を提供できる能力を育成するための教育内容や指導方法の開発	大学・企業等の専門分野との連携	第 2 年次	介護福祉士に関する知識や技術を活かした課題解決能力を育むアクティブ・ラーニングの視点による授業改善の研究 大学・企業の専門分野と協働するための教育内容や指導方法の開発	大学・企業等の専門分野との協働	第 3 年次	介護福祉士の専門的な立場から地域の福祉課題に主体的に取り組む、新たな価値を創造・発信できる人材育成に向けた教育内容や指導方法の開発	地域社会へ発信
第 1 年次	介護を必要とする様々な利用者に対し、基本的かつより専門性の高い介護を提供できる能力を育成するための教育内容や指導方法の開発	大学・企業等の専門分野との連携										
第 2 年次	介護福祉士に関する知識や技術を活かした課題解決能力を育むアクティブ・ラーニングの視点による授業改善の研究 大学・企業の専門分野と協働するための教育内容や指導方法の開発	大学・企業等の専門分野との協働										
第 3 年次	介護福祉士の専門的な立場から地域の福祉課題に主体的に取り組む、新たな価値を創造・発信できる人材育成に向けた教育内容や指導方法の開発	地域社会へ発信										

(1) ICT を活用した介護技術・知識の向上

生徒が衣服交換や排せつ介助などの基本的な介護技術を身につける方法として、情報端末の録画・再生機能を活用している。一方、介護現場では介護技術の向上とともに介護サービス利用者やその家族などに介護方法や介護の根拠などを伝えるための『介護を言語化できる能力』が必要とされている。そこで、介護実習後にグループワークを通じて学びを深め合い、ICT を活用した介護実習発表会を開催した。

日程	対象者	主な活動内容
5月～2月	1年生(38名)	介護実習発表会(7月・9月・11月・1月)を実施
	2年生(33名)	情報端末機器(録画・再生機能)を活用した介護技術を学習
	3年生(38名)	ウェアラブルカメラから利用者視線を映し出すことによる共感的な介護技術を学習
8月22日(火)	2年生(3名)	高校生介護技術コンテスト近畿地区大会(優秀賞受賞)に参加

(2) 認知症ケアのためのコミュニケーション技術

本学科は2年生で、認知症高齢者が生活するグループホームでの介護実習(6日間)を実施している。実習では認知機能の低下により、言語的コミュニケーションを図ることが難しい高齢者の方が多く、認知症の周辺症状による介護拒否や帰宅願望などにどのように対応すべきか戸惑う生徒もいる。そこで、認知症高齢者の方の感情レベルに訴えかけ共感することでコミュニケーションを図る技法であるバリデーションについて、日本における第一人者である関西福祉科学大学 都村尚子教授の特別授業を実施し、認知症高齢者の方に対して尊厳と共感を持って関わる態度や姿勢を身につけることができた。

日程	対象者	主な活動内容
6月13日(火)	2年生(33名)	【特別授業】 「バリデーションの誘いⅠ」
7月18日(火)～25日(火)	2年生(33名)	【介護実習】 「バリデーション法の実践」 (特別養護老人ホーム・介護老人保健施設・グループホーム)
9月28日(木)	2年生(33名)	【特別授業】 「介護実習にてバリデーション法を活用してⅠ」

(3) 医療的ケアに対する知識・技術の向上

介護福祉士の業務として喀痰吸引等の医療的ケアを行うことが可能となった。本学科も平成25年度入学生から医療的ケアに関する内容を指導しており、安全かつ適切な医療的ケアの指導方法について研究している。そこで、生徒が手順を覚えることのみならず焦点を置きがちである医療的ケアの演習の現状から、「利用者の立場」からの支援のあり方を検討し、危険を伴う援助の中で安全・安楽を確保するための観察や苦痛を伴うケアに対する心配りの視点を育む学習活動を研究している。ICT(ハンズフリーカメラ、タブレット端末等)を活用し、医療的ケアにおける利用者視線を映像として録画し、アクティブ・ラーニングの視点による授業改善を行った。

日程	対象者	主な活動内容
11月21日(火)	3年生(19名)	【公開授業】 SPH 研究成果発表会を実施 科目：生活支援技術「口腔内吸引の実施手順と留意点」 ～利用者の立場から支援の方法を考える～

(4) 社会起業家による特別授業

介護・福祉・医療従事者だけで超高齢社会を支えることは困難な現状であり、多くの地域住民が福祉についての「理解者」「応援者」として、自ら生活する町を創造していく必要がある。そこで、3年目は将来の地域コミュニティづくりの担い手の育成に向けて、高校で学習した介護技術や知識を活かして地域福祉の実践活動を実施した。具体的には、SPHの取組を通じて習得したエビデンスに基づいた介護技術を伝えるとともに、地域の人々との関わりを通じて社会的価値観(役割・使命・福祉観)を育んだ。

日 程	対象者	主な活動内容
10月11日(水)	2年生(33名) 3年生(38名)	【特別授業】「子どもが主人公となる居場所づくり」 講師 社会起業家 NPO 法人ハートフレンド 代表理事 徳谷 章子
11月10日(金)	1年生(38名)	【地域社会へ発信】「介護の日啓発活動」～大阪市役所周辺～ 地域住民に対して介護の日オリジナルティッシュを配布
11月18日(土)	3年生(2名)	【地域社会へ発信】「介護の日啓発セミナー」 介護福祉を学ぶ高校生としてリレートークに参加

(5) 福祉用具を活用した利用者の自立支援

京都女子大学と連携し、福祉用具を活用した「北欧の持ち上げない介護技術」を3年生が学習した。本年度は、特別授業で学習した「持ち上げない介護技術」をアクティブ・ラーニングの学習方法を活用し、大阪市社会福祉協議会と協働して地域住民の方を対象に、「家庭でやさしい介護のコツ」教室を実施した。家庭用のビニールシートやタオルを活用した移乗介助の方法を伝えることで、参加者からも「介護が楽になる」という声をいただき、好評であった。

日 程	対象者	主な活動内容
4月21日(金)	3年生(38名)	【特別授業】「バリアフリー展 2017 見学学習会」 タブレット端末機器を活用しレポートを作成
9月12日(火) 9月13日(水)	3年生(38名)	【特別授業】「北欧における持ち上げない介護技術Ⅰ・Ⅱ」 講 師 名 京都女子大学 助教 富田川智志
12月2日(土)	3年生(5名) 2年生(5名)	【地域社会へ発信】協働：大阪市社会福祉協議会 地域住民対象「家庭でやさしい介護のコツ」教室を実施

(6) 国際的な視野から日本の介護を考える

日本の介護の未来を見据えて、平成22年度より経済連携協定(EPA)により来日した外国人看護師・介護福祉士候補者との介護技術交流会を実施している。一般財団法人海外産業人材育成協会の協力のもと、関西研修センターで6か月間の日本語研修中のフィリピン看護師候補者に本学科2年生が利用者の気持ちを考えた浴衣の交換の介護技術を教えた。さらに新たな取組としてフィリピン看護師候補者から本学科2年生に対して、介護・医療現場で活用できる English Lesson を開催した。卒業後の介護現場において、外国人介護従事者と利用者の方にとってよりよい介護を提供するための課題を発見するとともに協働する方法について考察することができた。

日 程	対象者	主な活動内容
10月26日(木)	2年生(33名) 候補者(34名)	【特別授業】「国際的な視点から日本の介護について考える」 ・日本の文化である浴衣交換の介護技術講座 ・介護や医療現場で活用できる English Lesson

II 地域社会と繋がりをもつ福祉実践教育～地域福祉の課題に向けた専門分野との共創～

本学科で学習する介護福祉に関する専門的知識や技術を活かして、超高齢社会に伴う地域福祉の課題解決に向けて、他の分野との専門性と融合することでバリュークリエイターとして新たな価値を生み出し、地域社会へ発信する手法として次の3分野から研究を行った。

(1) 小中学生に福祉マインドの育成

超高齢社会の未来を担う小中学生に対して、「共に生きる。相手を思いやる心」を育む一歩として、毎年8月に小学生対象「やってみよう福祉体験」を実施している。本年度は、「子どもヘルパーにチャレンジ」をテーマとして西淀川区社会福祉協議会にあるデイサービスセンターを訪問し、高齢者の方と一緒に介護予防体操を実践するとともに、昼食の配膳を体験した。



教員対象研修会「福祉ってなあーに!？」

また、小中学校の総合的な学習の時間等で活用できる福祉教材 DVD を大阪市交通局、放送芸術学

院専門学校の協力のもと完成することができた。そして、実際に小中学生の先生方に福祉教材を活用していただくために大阪市教育センターと協働して、『福祉（ふくし）ってなあーに！？～盲導犬ユーザー&福祉を学ぶ高校生が伝えるバリアフリーレッスン～』というテーマで小中学校の教員対象に講習会を行った。小中学校の先生方と一緒に対話的な学びを通じて、高校3年間の介護福祉の学習について自信を持つとともに小中学生にわかりやすい福祉について思考・判断・表現する力を高めることができた。

(2) 健康寿命延伸に向けた介護予防体操の実施

健康寿命延伸に向けた活動に社会的な関心が高まっている中、SPH連携企業である株式会社第一興商による音楽を活用した介護予防体操の特別授業を実施した。介護実習では特別授業を通じて習得した介護予防体操を利用者の方と一緒に実践した。そして、利用者の声や介護職員の方のアンケート結果を検証し、運動機能向上や認知症予防に向けた音楽を活用した新たな介護予防体操を本学科生が主体的に考え、株式会社第一興商、放送芸術学院専門学校、大阪医療福祉専門学校と協働して新たな介護予防体操DVDを制作した。介護予防体操を介護実習で活用することで、利用者の立場に立った新たな介護予防体操について思考・判断・表現する力を高めることができた。



介護予防体操制作に向けて撮影風景

(3) 実習施設での介護ロボットの検証

介護現場では、利用者の方の生活を豊かにできる介護支援やコミュニケーションロボットの開発・実用化に期待されている。そこで、SPH連携企業であるピップRT株式会社が開発したコミュニケーションパートナーロボット「うなずきかぼちゃん」を、生徒がデイサービスセンター等での介護実習で活用した。実習後、利用者や職員の方のアンケート結果をもとに、企業にさらなる工夫・改善点を提案する「介護ロボット活用報告会」を開催した。そして、昨年度の「うなずきかぼちゃん」のリニューアルに際しては本学科生の意見を参考に採り入れていただけた。コミュニケーションパートナーロボットの検証を通じて、介護福祉を学ぶ専門的な立場から企業へ新たな工夫・改善点を提案することができた。



実習施設にて介護ロボットの検証

5 研究の成果と課題

○研究成果の普及方法

全国福祉高等学校長会や本校でのSPH研究成果発表会等を通じて、全国の福祉系高等学校の教員に本校の取組を発信することができた。さらに生徒たちはSPH事業を通じて学習した最先端の介護に関する知識や技術を活かし、地域住民に介護に関する講習会を実施した。また、小中学校の総合的な学習の時間等で活用できる福祉教材DVDを制作し、大阪市立の小中学校（420校）に配布するとともに出前授業や研修会を通じて福祉教育の推進を図っており、SPH終了後も継続していきたいと考える。

時期	研究成果の普及について主な大会・イベント名	発表者
7月	平成29年度高等学校産業教育担当指導主事連絡協議会（福祉）	教員
	第25回大阪府産業教育フェア	2年生
	全国福祉高等学校長会第23回研究協議会並びに福祉担当教員等研究協議会	教員
10月	第27回全国産業教育フェア秋田大会	3年生
11月	大阪府社会福祉協議会主催「介護きらきらフェスタ★2017」	3年生
	SPH研究成果発表会（公開授業&研究協議会）	3年生
12月	小中学校教員対象『福祉（ふくし）ってなあーに！？～盲導犬ユーザー&福祉を学ぶ高校生が伝えるバリアフリーレッスン～』	3年生
	大阪市社会福祉協議会主催「ウェルおおさかハートフェア」	2・3年生

○実施による効果とその評価

(1) 介護技術の専門性を検証するための評価

学校で学習した介護に関する知識と技術を統合し、介護現場で介護を行う生徒一人ひとりの実践力（状況に対応できる思考力・判断力・表現力）を数値化することで、生徒が次回の実習に向けて課題を明確化することができ、生徒の意識が高まった。また、学年全体として評価の低い項目（専門性が高い項目）については、福祉ボランティア科教員で学習過程の改善に取り組むことができた。

【表1 介護福祉士として必要な到達目標に関する調査（一部抜粋）】

- 対象者 平成27年度入学生 福祉ボランティア科 38名
- 時期 平成28年8月29日～9月9日 特別養護老人ホーム・介護老人保健施設 9日間実習
平成29年7月10日～7月28日 特別養護老人ホーム・介護老人保健施設 15日間実習
- 評価者 各高齢者施設における実習指導者

介護福祉士として必要な到達目標及び質問内容	年次	評価4	評価3	評価2	評価1
1 他者に共感でき、相手の立場に立って考えられる姿勢を身につけている。					
(1) 介護を必要とする人に共感的態度で接することができる。	2年次	36.8%	55.3%	7.9%	0.0%
	3年次	52.7%	44.7%	2.6%	0.0%
(2) 介護を必要とする人の立場にたって、その背景や気持ちを考えることができる。	2年次	23.7%	65.8%	10.5%	0.0%
	3年次	36.8%	60.6%	2.6%	0.0%
2 あらゆる介護場面に共通する基礎的な介護の知識・技術を習得する。					
(1) 利用者主体・自己決定を基本とした介護ができる。	2年次	15.8%	65.8%	18.4%	0.0%
	3年次	21.1%	71.0%	7.9%	0.0%
(2) 排泄介助・食事介助・入浴介助の基本的な介護技術ができる。	2年次	15.8%	60.5%	23.7%	0.0%
	3年次	23.7%	63.1%	13.2%	0.0%
3 介護を必要とする人の潜在能力を引き出し、活用・発揮させることの意義について理解できる。					
(1) 介護を必要とする人の意欲を引き出すような働きかけができる。	2年次	15.8%	65.8%	18.4%	0.0%
	3年次	28.9%	52.7%	18.4%	0.0%
(2) 介護を必要とする人一人ひとりの潜在能力に着目し活用できる。	2年次	18.4%	52.7%	28.9%	0.0%
	3年次	21.1%	63.1%	15.8%	0.0%
4 円滑なコミュニケーションの取組の基本を身につける。					
(1) 傾聴や言語的・非言語的コミュニケーション技術等を活用し、声かけが円滑にできる。	2年次	26.3%	55.3%	18.4%	0.0%
	3年次	39.5%	50.0%	10.5%	0.0%
(2) コミュニケーション障がいの人への特性に応じた対応ができる。	2年次	15.8%	50.0%	34.2%	0.0%
	3年次	15.8%	68.4%	15.8%	0.0%
5 的確な記録・記述の方法を身につける。					
(1) 事実を客観的に観察し、わかりやすく簡潔に記録できる。	2年次	13.2%	57.9%	28.9%	0.0%
	3年次	31.6%	50.0%	18.4%	0.0%
(2) 誤字・脱字がなく、適切な文章表現ができる。	2年次	21.1%	55.2%	23.7%	0.0%
	3年次	31.6%	50.0%	18.4%	0.0%
6 人権擁護の視点、職業倫理を身につける。					
(1) 利用者の尊厳の保持や、プライバシーの保護に心掛けた対応ができる。	2年次	34.2%	63.2%	2.6%	0.0%
	3年次	55.3%	44.7%	0.0%	0.0%
(2) 社会人としてのマナーを身につけ、規律を守ることができる。	2年次	26.3%	63.2%	10.5%	0.0%
	3年次	55.3%	44.7%	0.0%	0.0%

※4段階評価（4「はい」、3「どちらかといえばはい」、2「どちらかといえはいえ」、1「いいえ」）

(2) 介護現場における介護技術に対する評価の改善

本年度より、【表1】についてルーブリックを活用し4段階評価の指標を作成した。指標を作成することで、介護現場における実習指導者による評価が主観的になりがちであったが、各施設の実習指導者が同じ基準のもと評価でき、評価の客観性を高めることができた。

今後、介護福祉士の専門的立場からご意見をいただき、評価の指標を再検討することで介護・福祉分野の第一線で活躍できる人材を育成したい。

【表2 ルーブリックによる評価基準（一部抜粋）】

定義	4	3	2	1
1-(1) 介護を必要とする人に共感的な態度で接することができる。	多くの利用者の話を傾聴することができ、相手の感情に寄り添った声掛けや対応ができる。	多くの利用者の話を傾聴することができ、相手に声掛けや対応ができる。	一部の利用者の話を聞くことができ、相手に声掛けや対応ができる。	一部の利用者の話を聞くことができる。
2-(2) 利用者主体・自己決定を基本とした介護ができる。	多くの利用者に対して、利用者が選択・決定できる声掛けを行い、自己決定を尊重した支援ができる。	多くの利用者に対して、利用者が選択・決定できる声掛けを行うことができ、自己決定の支援ができる。	一部の利用者に対して、利用者が選択・決定できる声掛けを行うことができ、自己決定の支援ができる。	一部の利用者に対して、利用者が選択・決定できる声掛けを行うことができる。

(3) 生徒の意識に関する自己評価

生徒一人ひとりの意識の変化を把握するために、12月～1月各学年ごと10項目の自己評価を実施している。3年間のデータ分析からSPHでの事業活動を通じて、将来、介護福祉士として生きる力を育てていることがわかった。

【表3 3年次における意識調査（一部抜粋）】

●対象者 平成27年度入学生 福祉ボランティア科 38名 ●時期 平成29年12月実施

質問項目		4	3	2	1
① 超高齢社会に向けて、地域住民・隣人と協力して地域の課題に取り組みたいと思う。	2年次	18.4%	57.9%	23.7%	0.0%
	3年次	42.1%	47.4%	10.5%	0.0%
② 介護福祉の勉強を通じて自分の将来の職業に対する意識が高まった。	2年次	44.7%	31.6%	18.4%	5.3%
	3年次	63.1%	31.6%	5.3%	0.0%
③ 介護実習を通じて、介護福祉の仕事についてその魅力を理解する(気づく)ことができた。	2年次	34.2%	47.3%	13.2%	5.3%
	3年次	71.1%	26.3%	2.6%	0.0%

※4段階評価 4「思う」 3「どちらかといえば思う」 2「どちらかといえば思わない」 1「思わない」

○実施上の問題点と今後の課題

これまでに類を見ない超高齢社会を迎えた日本社会にとって、医療・介護・福祉分野における専門職の重要性が高まっている。その一方で本学科設置から15年目を迎えるが、この2年間の学科定員(40)に対する志願者数は90%～95%となっている。しかし、そのような社会的な背景の中で、SPH事業による生徒の意識に関する調査【表3】(平成27年度入学生3年次)の質問事項「超高齢社会に向けて、地域住民・隣人と協力して地域の課題に取り組みたいと思う」、「介護実習を通じて、介護福祉の仕事の魅力を理解することができた」について「思う」「どちらかといえば思う」の割合は89.5%、97.4%(表3)であり、生徒たちは3年間の福祉ボランティア科における教育活動を通じて介護の本質に気づくとともに、豊かな福祉観を育むことができた。

これからも、生徒たちが生き生きとしたSPH事業の活動を地域社会に発信することを重点におき、介護に関する新たなイメージ3K「感動」「希望」「可能性」が創造できる仕事として、介護福祉の魅力を日本社会に発信していきたい。

【別添資料1】

平成29年度教育課程実施計画表 大阪市立淀商業高等学校 福祉ボランティア科

教科	科目	標準 単位数	入学年度 学科 学年 学期	平成29年度				教科 計 ※	平成28年度				教科 計 ※	平成27年度				教科 計 ※	
				福 祉 ボ ラ ン テ ィ ア 科					福 祉 ボ ラ ン テ ィ ア 科					福 祉 ボ ラ ン テ ィ ア 科					
				Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		Ⅰ	Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ		
国 語	国語総合	4		3					3					3					
	基礎国語				2△					2△					2△				
	国語演習					2○					2○					2○			
	国語研究						2○					2○					2○		
								3~7										3~7	
地 史	世界史A	2				2					2					2			
	地理A	2	2						2					2					
公 民	現代社会	2			2					2					2				
								2										2	
数 学	数学I	3	3						3					3					
	数学A	2		2△						2△					2△				
	数学演習				2●						2●					2●			
								3~7										3~7	
理 科	科学と人間生活	2		2						2					2				
	生物基礎	2	2						2					2					
	生物演習				2※						2※					2※			
								4~6										4~6	
保 体	体育	7~8	3	2	2				3	2	2			3	2	2			
	保健	2																	
								7										7	
芸 術	音楽I	2		2□						2□					2□				
	書道I	2		2□						2□					2□				
								2										2	
外 国 語	コミュニケーション英語I	3	2	2					2	2				2	2				
	英数選択英語研究				2●						2●					2●			
	英理選択英語研究				2※						2※					2※			
	日常英語				2※						2※					2※			
								4~8										4~8	
家 庭	家庭基礎	2	2						2					2					
								2										2	
情 報	社会と情報	2																	
	小 計		17	12	10			39	17	12	10			39	17	12	10		39
福 祉	社会福祉基礎	2~6	2		2				2		2			2		2			
	介護福祉基礎	2~6	2	3					2	3				2	3				
	コミュニケーション技術	2~4	1	1					1	1				1	1				
	生活支援技術	4~12	2	4	4				2	4	4			2	4	4			
	介護過程	2~6		2	2					2	2				2	2			
	介護総合演習	2~6	1	1	1				1	1	1			1	1	1			
	介護実習	4~16	3	5	5				3	5	5			3	5	5			
	こころとからだの理解	2~12	2	2	4				2	2	4			2	2	4			
福祉情報活用	2~4			2						2					2				
	小 計		13	18	20			51	13	18	20			51	13	18	20		51
	総合的な学習の時間		0	0	0			0	0	0			0	0	0			0	
	ホームルーム		1	1	1			3	1	1	1			3	1	1	1		3
	総 計		31	31	31			93	31	31	31			93	31	31	31		93
備 考	△印科目から1科目選択 ○印科目から1科目、●印科目から1科目、※印科目から1科目それぞれ選択 □教科内から1科目選択 各学年の「介護実習」については、1単位分を夏季休業中に集中開講する。 「社会と情報」は「福祉情報活用」で、「保健」は「こころとからだの理解」で、「総合的な学習の時間」は「介護総合演習」で代替する。																		